

## 岑 参 評 傳 一

### 一、序言

宋の陸游(一一二五―一二二〇)は、岑参について次のように評価した。「嘗に以爲へらく、太白(李白)・子美(杜甫)の後、一人あるのみ」と(『跋岑嘉州詩集』)。陸游は岑参のことをどうしてこのように高く評価したのであるうか。陸游の作った「夜、岑嘉州詩集を読む」という詩から、いくらかその訳が分るであろう。

群胡自魚肉 群胡自から魚肉たり

明主方北顧 明主方に北を顧みる

誦公天山篇 公の「天山」篇を誦すれば

流涕思一遇 流涕して一遇を思ふ

ここに謂う「天山」篇とは、岑参の辺塞詩のことである。陸游は南宋の全中国を支配できぬ不安な局面に心を痛め、唐代の雄大な国力に対し、ある特殊な感情を抱いていたので、岑参の辺塞詩を心から好んでいた。これがおそらく陸游が岑参を推奨した原因である。

宋代の人と明代の人とはともに岑参をかなり重視した。現存の宋・明

廖 立 著

藤 井 良 雄 訳注

(平成五年九月十日受理)

の詩話中に岑参に触れたところは多く、盛唐の詩人では李白・杜甫を除けば、王維・孟浩然・高適・岑参ということになる。宋版の岑参集は今日までまだその半分が残っており、明代の人が刊行した岑参集は、かなり多種類にのぼる。それとは対照的に、元代の人と清代の人とは岑参に対して非常に冷淡であった。今日では元版の岑参は見られない。清代では、『全唐詩』に岑参集を採らないわけにかなかったのを除けば、非常に有名な『四庫全書』には竟に岑参の詩集は収められなかった。清代では書物に注釈を加える風習が極めて盛んであったが、岑参集に注釈をした人は誰もいなかった。清の嘉慶年間(一七九六―一八二〇)、宮廷内に一つの岑参集の抄本があったが、詩中の「胡」「虜」「戎」などの字すべて欠字であり、「顔真卿の河隴に赴くを送る」詩の「胡笳歌」という三字さえもすべて欠字であり、「走馬川の行」中の「匈奴」、「輪台の歌」中の「单于」までもみな欠字になっていた。このことからすれば、清代の人が岑参の詩の注釈をしなかったのは、やむを得ない苦衷が確かに有ったことがわかる。清代の人の詩話中では、岑参について触れているものの、すべて辺塞詩を避けており、かえって「早期大明宮」に唱

和した幾篇かの詩の優劣を比較することに対し相当の興味を示しており、これからでも一とおりのことは理解できよう。

中華民国時代に入ってから、幾つかの文学史が現われたが、やはり岑参をあまり重視しなかった。その後「五四時代」以後十数年になって、はじめて文学史家は徐々に岑参に注目するようになった。例えば、一九三〇年出版された趙景深（一九〇二—）の『中国文学小史』の第十七章は、「辺塞詩人岑参」であり、一九三一年の陸侃如（一九〇九—七八）・馮沅君（一九〇〇—七四）の『中国詩史』巻二・篇三・第四章は、「岑参及びその流派」である。この後、「辺塞詩派」という名称が文学史の中にたびたび現われるようになった。例えば一九三五年年出版された張長弓の『中国文学史新編』第十五章は、「辺塞詩派と自然詩派」で、一九四一年出版された劉大杰（一九〇四—七七）の『中国文学發展史』第十四章第四節は「高（適）岑（参）詩派」であり、さらに楊蔭深の『高適と岑参』という本は（一九三六年）、もっぱらこの二人だけについて述べたものである。しかし、これらの書物はすべて、歴史の観点から一般的な紹介と論述をなしただけで、具体的に深く掘り下げた研究ではなかった。解放前（中華人民共和国成立以前）、岑参について専門的な研究をした著作は、まず一九三〇年出版の賴義輝の『岑参年譜』を推せる。彼は岑参の生卒年や西域に赴いた年代等について解決を試みているが、しかしかなり証拠不足の結論が見られる。一九三三年、聞一多（一八九九—一九四六）著『岑嘉州系年考証』が出版されると、岑参の生涯中の重要な問題点について、ようやく人を信服せしめるほどに解決をなした。これは十分に精確な著作であって、あとに続く岑参研究者のために平坦な道を舗装してくれたのである。

中華人民共和国成立後、岑参についての研究はようやく活発になって

きた。それぞれ文学史の中に「辺塞詩派」についての専門的論述が見られ、研究論文も次々と出現し、数年前には辺塞詩に対する評価の問題をめぐって盛んな論争が展開された。中国は古くからずっと多民族国家であって、辺塞詩は中国領内の各民族間の戦争等の問題に触れることを免れないので、処理がうまくなければ、狭隘な民族主義的情緒を引き起こすことになるはずである。だから、論争は有益なものである。だが、岑参について言えば、二度も軍に従い西域に赴き、彼が言及した民族戦争は、唐朝の封建中央政権とチベット奴隸王地方政権と、あるいは降伏したり叛乱したりする突厥の残存部落（例えば阿不思）との闘争にはかならない。吐蕃も突厥もともに西域（とりわけ天山の南）の土着民でなく、独立を主張するわけでもなくて中央政権の管轄を受けている西域地区に侵入した。大食との戦争ということになると、なおさら外来侵入者に対する闘争であつた。それ故、岑参詩の中では、戦争に冷淡であろうと、戦争に情熱があらうとも、指摘できるような大きな欠点はない。詩中の胡・戎・匈奴・单于などの文字に至っては、すべて歴史の産物である。

辺塞詩に戦争と行役とを記したものが多いのは、これも歴史的淵源がある。中国の先秦時代の詩歌にすでに戦争と行役の作品があり、つまり『詩経』中の「東山」「采芣」、『楚辞』中の「国殇」がその代表である。漢代楽府の「戰城南」、古詩「十五從軍征」および曹操（一五五—二一〇）の「苦寒行」は、先秦から伝統の継続である。南北朝の時期は、戦争の題材の詩が少なく、その中では少数の作者に戦争の経歴があるだけで、大多数はただ漢の楽府題にかこつけて作っただけである。だから、本当の辺塞詩は、唐代になってこそ初めて正式に形成され、それが詩派と成ったのは、盛唐時代のことであつた。初唐の時期、辺境守備に従軍した大詩人は二人いた。ひとりとは駱賓王（六四〇—六八四）で、高

宗の時代、西域に行ったことがある。もうひとりとは陳子昂（六五六―六九八）で、則天武后朝のとき、河西の居延海と北方の幽州に行ったことがある。この二人が唐代辺塞詩派の先導者と言えよう。そうして大勢の辺塞詩人が現れたのは、唐・玄宗の開元・天宝年間（七一三―七四一―七五六）である。盛唐の時期、詩歌の中で辺塞を題材にするものがかなり流行し、辺塞に行ったことがある人で辺塞詩を作ろうとしたもの、例えば王翰（六八七―七二六）・王之渙（六八八―七四二）・王昌齡（六九八―七五七）・王維（六九九―七五九）・崔顥（七〇四―七五四）・李頎（？―七七五）・高適（七〇二―七六五）・岑参（七二五―七七〇）、があるの言うまでもなからう。辺塞の守備に従軍したこともない詩人でさえも辺塞詩を作ったのであり、李白（七〇一―七六二）・杜甫（七一二―七七〇）がその例である。万里の外で辺塞守備につき、黄沙の中に格闘し、あるいは戦功を立てて諸侯に封ぜられるか、あるいは決死の戦いをして封賞もないこと、戦死者の屍が辺塞の野草と同じく埃り白くなること、春の深閨の夫の帰りを思う婦人も北へ帰る雁を見て涙を流すこと、このような題材により確かに詩人たちのイマジネーションは自由にかけめぐった。盛唐時代の輝かしい戦功は、辺塞詩の繁栄のために適した土壌を準備したのであった。盛唐時代に辺塞詩人が多数に上り、辺塞詩派を形成することになったのは、当然その時代の産物であった。

数多い辺塞詩人のうちで、岑参には彼なりの特徴がある。まず一つは辺塞詩の数が多く、八十首近くあり、現存する岑参の五分の一を占め、その他の詩人と比べとび抜けている。二つめは、岑参には長期にわたる辺塞生活の経歴があり、その他の詩人で一部の者を除いて、辺塞生活の経歴は皆かなり短く、ある人はわずかに辺塞を一瞥しただけで、歩いた道程は、誰も岑参ほど遠くまでは行っておらず、この点が岑参の辺塞詩

のしっかりした基礎となっている。三つめは、岑参の辺塞詩には完全に成熟した独特の風格があり、先人から継承するところもあるが、その上に自己の独創と発展もあった。これらすべてによって、岑参が辺塞詩派中において、一つの突出した地位を占めている。

岑参は辺塞詩で著名であり、彼の最高の成果も辺塞詩ではあるが、しかし彼は決して辺塞だけを書いたにとどまらず、彼の詩には相当広泛な題材がある。嵩陽（河南省）に隠遁してから、十年間禄を求めて（科挙の受験勉強をし）、初めて仕官してから、四度は朝廷務め、二度都以外の郡へ任官して、多くの詩歌を残した。岑参は田園詩派ではないが、ただ彼にすばらしい田園詩があるのは、これは彼が「嵩陽に隠れること」（「感舊賦」序）十年の久しきにわたり、終南山下（陝西省）にもかつて隠居していたことがあつて、彼には長期の田園生活をした経歴があるからであつた。岑参の交遊範囲も非常に広く、友人との交際、官府での応酬の作がかなりの量を占めているが、しかしこれらの詩の価値はいささか低いものではあるだろう。

岑参の「走馬川の行」「輪台の歌」は、千二百年余りの今日読んでも、なお氣勢みなぎり、気魄人に迫るものである。岑参の幾首かの詩は、盛唐時代という進取的・開拓的で博大なる時代精神を表現している。杜甫はかつて岑参は沈約（四四一―五一三）の同業であると称賛し、また岑参を謝朓（四六四―四九九）になぞらえてもいる。（「岑嘉州詩集」序を著した中唐の）杜確は「時の議、公を具均（四六九―五二〇）・何遜（四八〇？―五二〇）に批せしは、亦た精当と謂ふべし。」（時の評判は、岑参を具均や何遜に並べはめているのは至極当っている。）と認めている。これはただ岑参の詩のある一面を突出させたものに過ぎず、しかもおそらくは主要な面ではないだろう。岑参の辺塞詩中いくつかの詩篇が

表現しているものは、決して（呉均・何遜など）齊梁詩人がなしているものではない。盛唐の最も偉大な詩人は、当然、李白と杜甫とであるが、ただし岑参も李杜以外の灿烂と輝く星の一つであることは確かなことであり、彼の名前を第一流詩人の中に列するべきで、郭沫若（『李白与杜甫』）も、この点では非常に正しかった。

現在に至るまで、『岑参集校注』を除いて、これまで岑参の生活・思想・藝術に関する系統的な研究がなされた専門の著作がなかった。この評伝の著意図は、岑参の生活経歴・創作の道・思想の発展などについて、一つの総合的・歴史的考察をなし、法則性をもったものにまとめ上げ、学术界・創作界の人々の参考に供することである。彼の生涯事迹の部分はまづ考証をし、彼の創作を評論する際は、詩人の感性の特徴という角度からはじめ、その思想・藝術の特点を説明するために、他の詩人とのいささかの比較をする。

## 注一

- (1) 陸游「夜読岑嘉州詩集」(『劍南詩稿校注』卷四・錢仲聯校注三三三頁)  
漢嘉山水邦 岑公昔所寓 公詩信豪偉 筆力追李杜 常想從軍時 氣無王  
關路(原注。公詩多從戎西邊時所作。) 至今靈簡傳 多昔橫槊賦 零落  
財百篇 崔嵬多傑句 工夫刮造化 音節配韶護 我後四百年 清夢奉巾履  
晚途有奇事 隨牒得補處 羣胡自魚肉 明主方北顧 誦公天山篇 流涕思  
一遇(漢嘉 山水の邦 岑公 昔寓せし所 公の詩信に豪偉なり 筆  
力李杜を追う 常に想ふ從軍の時 氣に王關の路なし 今に至るまで靈  
簡傳わり 昔の槊を横たふの賦多し 零落 百篇を財とし 崔嵬  
傑句多し 工夫 造化を刮し 音節 韶護を配す 我後四百年に  
清夢 巾履を奉ず 晩途に奇事有り 牒に隨ひて補する處を得

羣胡自ら魚肉たり 明主方に北を顧みる 公の天山篇を誦すれば 流涕 一遇を思ふ

(2) 乾元元年(七五八)暮春、中書舍人であった賈至の「早期大明宮呈兩省僚友」に対して、岑参「奉和中書賈至舍人早期大明宮」、杜甫「奉和賈至舍人早朝大明宮」と王維「和賈舍人早朝大明宮之作」が伝わる。

(3) 杜甫は「寄彭州高三十五使君適州岑二十七長史參三十韻」詩中で「高岑殊緩歩 沈鮑得同行」(「高適岑参 殊に歩を緩め 沈約鮑照同行するを得」と、また「寄岑嘉州」詩に「謝朓每篇堪諷詠」(謝朓のごとく毎篇 諷詠に堪ゆ)と詠っている。

(4) 杜確「岑嘉州詩集」序「時議擬公於吳均・何遜、亦可謂精當矣。」

(5) 郭沫若「李白与杜甫」三四五頁、「杜甫的詩友岑参、同是盛唐的第一流詩人、小杜甫三歳。」(一九七二年・人民文学出版社)。

## 二、「嵩陽に隠る」

## 1、岑参の家柄

岑参は後漢の征南大將軍岑彭の子孫である。岑彭は南陽郡棘陽県(今の河南省の南陽と新野両県の間)の人で、彼の子孫はずっと南陽棘陽の人と呼ばれていた。実はその後の変化があまりに多く、岑参の先祖たちはすでに長年、棘陽に住んではいなかった。南北朝の梁代の末、岑彭の子孫・岑善方は蕭譽について江南から襄陽(湖北省)に来て、それから荊州の江陵県に着いた。すなわち「官、迹を投ずるに因り、荊州に寓居す」(官に身を置くことになったので、荊州に居寓した)であった。岑善方の息子・岑之象は、初め北周で官を務め、その後は隋朝で何回か北方の県令に任じたことがある。岑之象の息子・岑文本は江陵で家を起し、

唐に入つて先ず秘書官となり、貞觀（六二七—四七）の末年、宰相に昇進した。この人が岑参の曾祖である。岑文本は高官で人望も厚く、唐朝・太宗の功臣の一人で、死後「昭陵に陪葬された」<sup>3</sup>ほどで、彼は最も子孫に仰がれ、子孫に及ぼした影響も最も大きかった。岑文本は廉潔な「清官」で、一生資産を蓄積せず、「居處は卑陋、室に茵褥帷帳の飾無し」、しかも政務に勤めて、最後には遠征の途中、過勞で死に、歴史家に称賛された。とりわけ岑文本には優れた文才があり、少年時代からもう「博く經史を考し、貫綜する所多く、談論美にして、善く文を属る」（經書と史籍とを博く学び、通達したところが多く、談論すばらしく、文章を綴るのが上手であつた）。隋の煬帝大業五年（六〇九）、岑文本の父・岑之象は邯鄲県令となつたが、人に訴えられ申し開きもできなかったので、十四歳の岑文本はその冤罪を晴らすため司隸台（檢察庁に相当）に赴くと、

辞情慨り切に、召対明らかに辨じ、衆頗る之を異とす。試みに『蓮花の賦』を作らしむるに、筆を下せば便ち成り、屬意甚だ佳にして、台を合して嘆賞せざる莫し。其の父冤雪がれ、是れに由りて名知らる。（うったえの表現は慨りが切実で、召喚の応対にも明白に弁明し、大多数の人々が彼のことを非常に優れていると思つた。試しに『蓮花の賦』を作らせてみたところ、筆を執つて立ちどころに作り、寄せられた思ひは甚だ佳く、司隸台中の人みな感嘆して賞賛しないもはなかつた。父親の冤罪も晴らすことができ、これで名前が知られるようになった。『旧唐書』卷七十。）

のである。岑文本が長安にやつて来て秘書郎となつた後に、『籍田の賦』・『三元の賦』をたてまつると、彼の才名はさらに有名になつた。中書舍人に拔擢され、彼が起草した詔誥の文章は、「或いは衆務繁湊なるとき、

即ち書僅六七人に命じて口に随ひ并せ写せしむるに、須臾にして悉く成り、亦た殆ど其の妙を尽くせり。」（仕事が多く多忙なときは、書記ボーイ六七人に命じて口頭筆記させると、立ちどころにすべて文章が出来あがり、その上ほとんど絶妙の文章であつた。『旧唐書』卷七十）また令狐德棻と協同して『周史』を書いたが、「史論、多く文本より出づ」であつた。これらもすべて子孫が誇りとするに値することである。岑文本が長安に来てから、母親・弟たちもみな長安に移らせたので、彼の子孫は以後はもう江陵に返ることはなかつた。『法苑珠林』・『大清一統志』が、岑参は江陵の人であると言うのは、つまり岑文本の家業の起り始めが江陵であつたという点に基づく。しかし實際は、岑参の世代は、江陵とは全く關係なかつた。

岑参はかつて「相門の子」と自称しているが、岑氏は唐朝の初めに三人の宰相を出しており、岑文本のほかさらに岑長倩・岑羲がいて、初めは順調であつたが終りをよくしなかつた。岑長倩は岑文本の甥で、彼の父親の名は岑文叔で文本の兄である。岑文叔は早く亡くなり、それで長倩は「少くして文本の鞠する所と爲り、己の子と同じくせらる」（『旧唐書』岑文本伝）。唐・高宗の永淳年間（六八二—八三）、岑長倩もまた兵部侍郎同中書門下平章事すぐに宰相となつた。武則天が帝位についてから、岑長倩は又、文昌右相を拝し、鄭国公に封ぜられた。この人も武則天に阿諛して、上疏し皇嗣（世継ぎ）の姓を武氏に改めるよう請うた。武に改姓するとはいへ、当然それは唐・高宗・李治の息子なのである。天授二年（六九一）になって、また諂うものたちが連名で上表し、武承嗣を立てて皇太子にするように請うた。これが武則天の実家の甥であり、李姓ではなくるのである。だがこの時、岑長倩は皇嗣がすでに立っており、さらに他人を立てることなど出来ず、もう一人の宰相・格輔元と

ともに署名せず、かつ上書した人をきつく責めるように請うたところ、専権跋扈している武氏側の人々から罪せられた。酷史であつた来俊臣が岑長倩・格輔元・歐陽通らの数十の一族を謀反と証告したので、市に斬罪せられ、岑長倩の五人の子供はみな死を賜り、さらに先祖の墓まで暴かれた。岑参の『感旧の賦』は、この冤獄事件が岑氏一族全体に及んだことに言及し、次のように述べている。

既に我が室破れ、又た我が門壊る。上帝憐憫にして、我が冤を知る莫し。衆人憎憎にして、我が為に言はず、賈誼を長沙に泣き、屈原を湘沅に痛む。(もうすでに我が家、我が一門は破壊された。皇帝愚かであり、我が一門の冤罪に気が付かれなかった。多くの人々は我々を憎悪しており、誰も我々の為に口をきいてくれなかった。私は、昔、長沙王の太傅に左遷され亡くなった賈誼の身の上を泣き、楚の懷王に疑われ汨羅の川に身をなげて死んだ屈原のことを痛み悲しむのである。)

岑参の父親はもとは蒲州司戸参軍であつたが、このときも夔州雲安県(今の四川省雲陽)の県丞となり、貶謫にあつた。岑氏からも一人宰相を輩出しているが、これがつまり岑参の伯父・岑羲である。岑羲は進士及第後、太常博士に昇進していたが、岑長倩が殺され、彼も罪に株連せられて郴州(湖南省)司法参軍におとされ、され金壇(江蘇省)の長官に左遷された。宰相の韋嗣立は、たとえ家に殺されるような人がいて出身が良くなかろうとも、岑羲には才能があると彼を推薦した。武則天は、才能が有りさえすれば彼の家がどうであろうとかまわないと言つた。そこで、家庭まで巻き添えにされて未だ重用されずにいる人みな拔擢され、岑羲も宮中に入り天官(吏部)員外郎となり、中書舍人に拔擢された。唐朝・中宗の神龍年間(七〇五―六)初めに、武三思が権力を掌握した

ので、侍中の敬暉が上表し、武氏の人々の王爵を削り去ることを請おうと思ひ、人の上に表文を書いてくれるように頼んでも、みな武三思を恐れ誰も筆を執るものはいなかった。岑羲はその当時、中書舍人で勇敢にその任に当たり、上表文の言辞が切実直截であつたので、また武三思により罪を着せられ、秘書少監に左遷された。しかしその後は、吏部侍郎・同中書門下三品に転じ、まもなく又、陝州刺史に貶謫され、唐・睿宗の景雲年間(七一〇―一一)初め、同じく三品で南陽郡公に封ぜられた。玄宗が即位して間もない頃、岑羲は太平公主の玄宗廢立謀議に参画し、事件が発覚し誅せられ、岑家一門みな差し押さえられ没収された。この折の災難について、岑参は『感旧の賦』の中で次のように感慨深げに述べている。

是の時に当りてや、偏側崩波し、蒼黄反覆せり。郷を去り土を離れ、宗を墮<sup>お</sup>づし属を破る。雲雨に流離し、江山に放逐さる。蒼梧の雲を愁い見、湘潭の竹を泣き尽くす。或いは黒齒の野に投ぜられ、或いは文身の俗に竄せらる。(この時には、我が一門は切迫し混乱して、翻覆をくり返した。故郷を去り領土を離れ、宗廟の祭祀をくづし、一族も破滅させた。雲雨の中に流浪し、はるか江山のほとりに放逐せられた。舜が葬られたと伝わる蒼梧山を愁いの目で見、亡くなった舜を悲しんで泣いた娥皇と女英との涙の斑竹が茂る湘潭の竹を見て涙あふれる。一族のあるものは食人の黒齒の国まで投げ出され、またあるものは南方僻遠の文身の風習の蛮俗に流竄せられた。)

このとき連座し罪せられた親族も非常に多く、その年時もあり岑参の時代に近く、だからその影響もより大きかった。張景毓の『岑公徳政碑』は景雲二年(七一―)に作られているが、当時まだ太平公主事件は發生しておらず、それ故、岑植はやはり「擢せられ一官を授かる」のであつ

た。しかし、先天二年（七一二）、岑羲が誅せられ、岑植もおのずと連座し罪せられた。そうでなければ「感旧の賦」がそれほど沈痛であるはずがない。岑植はその時一体「黒齒之野」に行ったのか、それとも「文身之俗」の地に行ったのか、史料が欠乏している為に、明確に知るのにはむづかしい。ただし、この事は必ず家庭に影響を及ぼしている。というのは、先祖三代が宰相となり、このような昔日の栄光は、子孫の心にも銘記されていたからである。「感旧の賦」も、かつて岑羲が宰相であった時、岑氏の富貴輝く様子を思い起こし述べたことがあった。

朱門改まらず、画戟重ねて新なり、暮に黄閣より出で、朝に紫宸に趨く。綉轂路に照り、王珂塵に驚く。親戚を列して以て高會し、歌鐘を上春に沸かす。小と無く大と無く、皆縉紳たり。顯顯昂昂として、数十人を踰ゆ。（朱塗りの高官の邸宅は変わらず、門戟も重ねて新しい。暮には黄閣より退庁し、朝には紫宸殿に登庁する。豪華な車は路に照り映え、馬のくつわの玉飾りは世間を驚かす。親戚を集め盛大に宴会し、歌鐘を正月の宴に沸き上らせる。年少のものも大人もみな縉紳となり、盛大まさに数十人を超えた。）

このように深刻な懐旧の念は、とりわけ岑参が「早歳にして孤貧」（早くから父親を無くし貧乏・杜確「岑嘉州詩集」序）であったので更に強烈であった。

参、年三十にして、未だ一命に及ばず。昔は一つに何ぞ栄えたる。今は一つに何ぞ悴れたる。（「感舊賦」序）

前代の栄光と自身の没落と、これこそ岑参の深い感慨を引き起こす。このような感慨の気持ちは、岑参の一生涯、終始貫徹しているようである。この点は彼と同時代の詩人の身の上では、もちろん有りうるものはなかった。その上、岑氏の先祖は位人臣を極め、続いて誅殺、没収を

受け、このような世事の「蒼黄反復」（どんでん返し）のくり返し・「感旧賦」は、岑参の思想の上に必ず深く黒い影を投げかけている。岑参が後に官となろうとしたり官を去ろうと想ったりする際でも、当時の社会思潮の影響および具体的に遭遇した変化のほか、彼の先祖が遭遇した事件の影響もおそらく重要な原因の一つであったであろう。

岑文本には二人の息子がおり、長男の岑曼倩は官位は雍州長史（二元和姓纂）では刺史と謂う）で終り、次男の岑景倩は麟台少監・衛州刺史・昭文館学士になったことがあり、この人がつまり岑参の祖父である。岑景倩には四人の息子がおり、長男の岑植が岑参の父親である。岑植はかなり名声があり、唐朝・睿宗の景龍（景雲）二年（七〇八）、彼は句容県令（江蘇省）から拔擢され他の官位に昇進して離任する際、彼の部下たちは岑植のために「德政碑」を立て、その碑文は今なお伝わっていて、それにより彼の前半生の経歴について大体のことが了解できる。岑植、字は德茂、二十歳で修文生に選ばれ、明経科に合格し、同州（今の陝西省台荔）参軍事として官僚となり、特に蒲州（今の山西省永濟）司戸参軍事を授った。岑長倩が誅せられると（六九二）、岑植は雲安県丞（四川省）に左遷された。任期が終ると、父（岑景倩）の喪に服するために官職を去った。喪が明けて、衛州司倉参軍（浙江省）に任官されて、後ほどすぐ句容県令（今の江蘇省句容）に拔擢された。『新唐書』宰相世系表によると、岑植は最後には仙州刺史（今の河南省葉県）・晋州刺史（今の山西省臨汾）を務め、おそろしく亡くなったのは晋州の任地であっただろう。岑植は官として清廉で、家には資産など無く、彼が岑文本の遺訓をまじめに遵守したことがわかるが、彼が死んでしまうと、岑参はもう「早歳にして孤貧」なる生活をするはかなくなってしまうた。

岑参の上には二人の兄がいる。長兄の岑謂は澄城（西安同州）の丞と

して官を終えたが、その他について考証できない。次兄の岑況は、湖州別駕（浙江省・刺史の補佐役）として官を終えており、彼のことについて少し多く知られる。「感旧賦」に「仁兄の教導を荷なう」という話があるが、それはおそらく次兄である岑況のことを指しているだろう。岑況は天宝年間（七四二―七五五）、単父（今の山東省單県）の長官を務めており、その政治の評判が非常に高く、著名な詩人・劉長卿（七〇九―七八五）と友人であった。岑参は詩の中で何度もこの次兄のことに言及している。例えば「梁園の歌 王説判官の河南に赴くを送る」には、

單父古來稱宓生 單父 古來 宓生を称う  
祇今為政有吾兄 祇だ今、政を為すに吾兄有るのみ

（原注）家兄時宰單父 家兄時に單父を宰す。

輜軒若過梁園道 輜軒 若し梁園の道を過ぎらば  
應傍琴臺聞政聲 応に琴臺に傍ひて政声を聞くべし

「楚丘の麴少府の官に赴くを送る」には、

單父聞相近 單父 相近しと聞く

家書早為傳 家書 早に為に伝えよ

と詠っている。岑況は後に江南の湖州（今の浙江省呉興）で官僚となつたが、岑参は「人の江寧に帰るを送る」詩に、

吾兄應借問 吾が兄応に借問すべし

為報鬢毛霜 為に報ぜよ 鬢毛霜なりと

「揚州の王司馬を送る」詩に、

為報吾兄道 為に吾が兄に報じて道え

如今已白頭 如今 已に白頭なりと

と、この両詩中に見える「吾が兄」も岑況のことであるはず。岑植の死後、父親に替わって弟たちに教育できたのは、まさにこの岑況であった

はずである。兄が弟の先生でありえたのは、おそらく年齢差が十歳以上あったと見積られるからである。岑参にはさらに二人の弟がいた。太子贊善太夫の岑乗と長葛（県）丞の岑垂であった。岑植が亡くなった時、岑参は約十歳ぐらいで、そのため二人の弟との年齢差はあまりなくて、三、四歳ぐらいであろう。岑参が長安に到ったあとは、弟が一人彼と一緒にであった。王昌齡に開元二十八年（七四〇）、「岑参兄弟に留別す」という詩があるが、岑参はこの年二十六歳で、この詩の弟とはおそらく二十歳過ぎで、たぶん岑乗であろう。岑乗は、岑参の長安での詩「高冠潭口に還るに舍弟に留別す」、「太白東溪の李老の舍に宿し弟侄に寄す」でもおそらくすべて岑乗であろう。岑垂（亞）の年齢はもっと小さく、開元中にはまだ成年に達しておらず、母親のところに留まっていたのであれば、岑況について勉強していた。岑参兄弟五人は、年齢が明らかに二グループに分れるので、おそらく同一の母親が生んだのではなからう。彼らの父親・岑植は二十歳で修文生であり、明経科に登第したのは二十歳以後で、岑長倩が殺された天授二年（六九一）には、すでに二度も「州佐」に任官しており、年齢は三十歳ぐらいのはず、それで岑植は唐朝・高宗の麟徳二年（六六二）ごろに生れていたであろう。岑参は開元三年（七一五）に生まれ、当時父親はすでに五十四歳ぐらいだった。岑参の一番下の弟・岑垂が出生したときは、岑植は六十歳ぐらいであったはずである。唐代の初め、戸数が激減したため、早婚を提唱して太宗は詔を下し、男は二十歳、女は十五歳になればすぐ婚姻をするよう命令しているが、これは一つの人口増加政策であった。岑植の出身は官僚の家柄で、もしかするとこの限りではないかも知れぬが、最も遅くても三十歳で結婚したはずで、上の二人の息子はおそらく四十歳以前に生まれている。岑植の夫人は、岑植より少くとも十歳は若く、岑垂の出生した時、



五十歳ぐらいであつて、すでに子供を生育する年齢を過ぎており、このため岑参は岑植の正室が生んだのではないのならば、庶出であるにちがいない。岑参の父親は早く亡くなつて、彼の生母は三人の小さな息子を引き連れ長年暮していたが、ただ岑参の詩中では兄や弟には言及しており、また「閨中に寄す」詩もあるが、かえつて一言もこの母親に言及していないのは、おそらくはこの母の出身・地位にかなり関係があるからであらう。

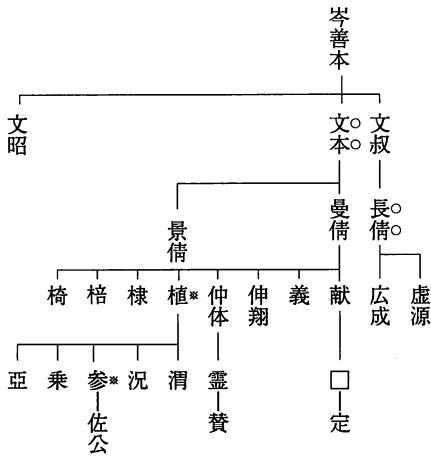
注二の一

(1) 原注①唐の張景毓『大唐朝散大夫行潤州句容縣令岑公德政碑』、『続古文苑』卷十八に見える。

(2) 同上。

(3) 原注②『旧唐書』卷七十「岑文本伝」に見える。下同じ。

(4) 参考までに岑氏の系図を掲げる。聞一多「岑嘉州繫年考証」に拠る。



(5) 「梁園歌送河南王説判官」(陳鐵民・侯忠義「岑参集校注」卷二・一二三頁)

君不見梁孝王修竹園 類牆隱驕勢仍存 嬌娥曼臉成草蔓 羅帷珠簾空竹根  
大梁一旦人代改 秋月春風不相待 池中幾度雁新來 州上千年鶴應在  
梁園二月梨花飛 却似梁王雪下時 當時置酒延枚叟 肯料平臺狐兔走 萬  
事翻覆如浮雲 昔人空在今人口 單父古來稱宓生 祇今為政有吾兄 輜軒  
若過梁園道 應傍琴臺聞政聲

(君見ずや梁孝王の修竹園 類れし牆 隱驕として勢い仍お存す 嬌娥

の曼臉 草蔓と成り 羅帷珠簾 空しく竹根あり 大梁一旦にして人代  
改まり 秋月春風相ひ待たず 池中幾度か雁新たに來り 洲上千年鶴應

に在るべし 梁園二月梨花飛び 却つて梁王 雪下るの時に似たり

當時置酒し枚叟を延き 肯へて平台に狐兔の走るを料らんや 万事翻覆

すること浮雲の如く 昔人空しく今人の口に在り 單父に古來 宓生を

称え 祇だ今 政を為すは吾が兄有るのみ 輜軒若し梁園の道を過くれ

ば 応に琴台に傍ひて政声を聞くべし)

(6) 「送楚丘鞠少府赴官」(同上卷二・一一六頁)

青袍美少年 黄綬一神仙 青袍の美少年 黄綬の一神山

微子城東面 梁王苑北邊 微子の城の東面 梁王の苑の北辺

桃花色似馬 榆莢小於錢 桃花 色 馬の似く 榆莢 錢より小さき

單父聞相近 家書早爲傳 單父 相近きと聞く 家書早く為に伝えよ

(7) 「送人歸江寧」(同上卷三・二〇〇頁)

楚客憶鄉信 向家湖水長 楚客郷信を憶ひ 家に向ひて湖水長し

住愁春草綠 去喜桂枝香 愁を住め春草緑なり 喜に去りて桂枝香る

海月迎歸楚 江雲引到鄉 海月楚に帰るを迎え 江雲引きて郷に到る

吾兄應借問 爲報鬢毛霜 吾が兄應に借問すべし 為に報ぜよ鬢毛霜な

りと

## (8) 「送揚州王司馬」(同上卷三・二〇一頁)

君家舊淮水 水上到揚州 君が家旧は淮水 水上 揚州に到る  
 海樹青官舍 江雲黑郡樓 海樹 官舍に青く 江雲 郡樓に黒し  
 東南隨去馬 人吏待行舟 東南のかた去馬に隨ひ 人吏 行舟を待つ  
 爲報吾兄道 如今已白頭 爲に吾が兄に報じて道へ 如今已に白頭なりと

## (9) 王昌齡「留別岑參兄弟」(李雲逸注『王昌齡詩注』卷一・五一頁)

江城建業樓 山盡滄海頭 江城建業の樓 山尽く滄海の頭  
 副職守茲県 東南擢孤舟 副職にて茲の県に守たり 東南のかた孤舟を  
 擢ぐ  
 長安故人宅 秣馬經前秋 長安の故人の宅 馬を秣いて前秋經たり  
 便以風雪暮 還爲縱飲留 便ち風雪を以て暮れ 還た爲に飲を縱まみに  
 して留まれり

紹蟬七葉貴 鴻鵠萬里游 紹蟬七葉に貴く 鴻鵠 万里に遊ぶ  
 何必念鐘鼎 所在烹肥牛 何ぞ必ずしも鐘鼎在る所 肥牛を烹るを念は  
 んや

爲君嘯一曲 且莫彈箜篌 君が爲に一曲を嘯ふも 且く箜篌を弾くなし  
 徒見枯者艶 誰言直如鉤 徒だ枯者の艶なりしを見るのみ 誰か直なる  
 こと鉤の如しと言はんや

岑家双琼樹 騰光難爲儔 岑家の双の琼樹 光を騰げて儔と爲り難し  
 誰言青門悲 俯期吳山幽 誰か青門悲しと言はん 俯して期す 吳山幽  
 なり

日西石門嶠 月吐金陵洲 日は西す 石門の嶠 月は吐く 金陵の洲  
 追隨探靈怪 豈不驕王侯 追隨して靈怪を探れば 豈に王侯に驕らざらんや

## 2、青少年時代の生活

岑参の生涯は長寿であつたとはいえず、五十五歳でもう逝去した。彼の生涯でいちばん光輝く歳月はさらに短く、つまり西域に二度にわたつて従軍した六年間であり、この間に千古不滅の辺塞詩を創作した。彼の幼年時代は出生から始まり、仙州・晋州で二つの童年期を経ているが、この時期の生活について今日では掘るべき文献の記載が少しもなく、ただあらましのことしか分らない。「十五にして嵩陽に隠る」から、二十歳にして書を宮廷に献呈した後、長安・洛陽間を十年の長きにわたつて行き来して、三十歳で進士に合格するまで、この間の大部分が(出仕しない)隱居生活であつた。岑参の山水田園詩は大部分この時期に作られたものである。詩が残っていることにより、我々は彼のこの時期の生活・思想等についてかなり多く理解できる。

唐朝・玄宗開元三年(七一五)二月、以前あつた許州・唐州から数県が分れて、新しく仙州を設置し、州政府は葉県、今の河南省葉県南三十里の旧県郷である。岑参の父親・岑植は江南で何年間かかなり低い官職を続けたのち、この年仙州刺史に昇任した。唐代では中・下州の刺史は正四品下で、毎月の俸給は一万一千、禄米二百四十石、職田七頃、公廩田(所管の官庁田)八頃、下僕十二人、白直(使い走り)十二人である。これは小さくない数字であつて、人民から搾り取る必要はなく、一家のかなり裕福な生活を維持できた。岑参の母親も仙州について来て、この地でもなく岑参は生まれた。仙州は後漢時代の仙人・王喬がかつてこの地の県令であつたと伝えられるところで、彼は陰暦の一日と十五日に都に登り皇帝にお目どおりするが、だが彼には車馬がないので、二羽の鳧に乗つて洛陽まで飛んで来たといわれる。皇帝は太子に命じ、網を張らせて捕らえさせたところ、片一方の鞋だけであつたという。岑参には

小さいときからこの物語の印象がとりわけ深かったので、そののち詩を作る際にはこの典故をよく使用している。岑植は仙州で五年間ずっと刺史であり、岑参が六歳の時ようやく晋州刺史に改め任ぜられた。幼年の岑参は神仙物語に非常に興味を覚え、彼が五歳で読書を始めると啓蒙的な物語の中に、おそらく『列仙伝』や『神仙伝』等のたぐいの書があった。岑参の詩中にはその典故が神仙物語にあるものが少くない。例えば「井陘双溪の李道士の居る所に題す」詩では、

唯求縮却地 唯だ地を縮却するを求むるのみ

郷路莫教除 郷への路 除かならしむ莫し

「戎瀘の間、群盗に阻まる」詩では、

何當遇長房 何<sup>い</sup>當、(費)長房に遇いて

縮地到京関 地を縮めて京関に到らん

願得隨琴高 願はくば 琴高に隨ふを得て

騎魚向雲煙 魚に騎りて雲煙に向わん

とある。伝えられるところでは、後漢の仙人費長房は地脈を縮め、千里も離れた遙かなたの地を、あたかも目前に置くことができ、ゆるめると原状に復した。話の内容は葛洪の『神仙伝』に掲載されている。<sup>3</sup>さらにこの詩中に「願はくば 琴高に隨ふを得て 魚に騎りて雲煙に向はん」とあり、伝えられるところでは、戦国時代、趙の国の琴高は養生の術が上手で、冀州などの地に二百年余りも住んでいた。彼はある時、潁水(安徽省)中に入つて龍の子を捕えようとし、弟子に決めた日どおりに戻つて来ると約束した。弟子たちがその期日に、水べりに来て待つてみると、果して琴高が鯉に乗つて水中から出てきた。この話は『列仙伝』(劉向作と旧くから題される)に載っている。<sup>6</sup>神仙から人事に及ぶまで、岑参がやや成長した後「徧く史籍を覽て」(杜確「岑嘉州詩集」序)い

るが、このような興味は幼年時からすでに始まっていた。

おそらく開元八年(七二〇)春、岑植は改めて晋州刺史に任ぜられ、それで一家はまた今の山西省臨汾に引つ越した。仙州は小さな州だが、晋州は人々も多く豊かな上等の州であった。この上級州の刺史は従三品で、俸禄も一等級高くなつたので、それでこの時の転任は昇進であつた。岑植が句容県令であつた時、江東黠陟使(人事評定官)の源乾曜から才能を見込まれており、この年初、源乾曜が朝廷に入り宰相となつたので、この度の転任も源乾曜と関係があつたとわかる。晋州は古代では平陽と呼ばれており、古の陶唐氏堯帝の都の所在地であり、この州の刺史となることは名声も仙州刺史よりはるかに高かつた。晋州にやつて来て、岑参も一段と成長し、読書勉強するほか、ときには人に伴なわれて汾水の河辺まで遊びに行つたこともある。汾橋のほとりに一列に植わっている柳の樹は風にゆれていたが、岑参は非常に喜び、長年たつても、彼はまだこの風景を記憶していた。九歳になつた年、岑参は文章を書くことを学び始めたが、これこそ大人になつて任官するためなのである。源乾曜は開元八年(七二〇)から、ずっと十年間、宰相であつたので、岑植がもしもう何年かでも長生きしていれば、源乾曜からかつき出され、都に入りより高い大官になる可能性が非常に大きかつた。しかし、命運は佳からずで、岑植は晋州での任官中、幾年もしないうちに死去した。岑植の死後、岑参の母親は三人の幼児を引き連れ、晋州に住み着いて、貧しい生活を過しており、さらに八・九年ずっと住み続けたのである。

岑氏はやはり官僚の家柄で、かつて二度も変事に見舞われたが、後にはかなりもちなおし、それで官僚となる人もずっと少なくなかった。岑氏には長安、洛陽附近にそれぞれ小さな別荘があり、おそらくこれらは先祖が残してくれたもので、王屋県(洛陽東南)青蘿河畔もその一つ

である。岑参が十四歳の時、一家あげて河南府王屋県（今の河南省済源県王屋郷北）に引つ越した。この県の北方十里に有名な王屋山があり、山の東側には青羅河が流れ、それは山西省陽城県境から源を発し、王屋山のふもとをめぐり、丘陵地帯を流れ、南へ向かつて黄河に注いでいる。王屋山の主峰は現在名、天壇山であり、岑参の青羅にあつた古い家は、この天壇山の南・青羅河畔にあつたのだが、しかし今日ではすでに尋ねべき何の遺跡もなくなっている。岑参は河の西岸に住んでいたので、それで彼は青羅河を東溪と称した。「南池にて夜宿し、青羅の旧齋を思ふ」詩には次のように詠われている。

早年家王屋 早年 王屋に家し

五別青羅春 五たび別る 青羅の春

安得還舊山 安くんぞ得ん 旧山に還り

東溪垂釣綸 東溪に釣綸を垂るるを

この詩は岑参が虢州長史の任にあつた折、若かりし年に王屋山のみもとに住んでいたころ、よく青羅河に魚釣りに行つた閑かな生活を思い出したものである。王屋には一年ぐらい住んだようで、岑家一家また引つ越した。

開元十七年（七二九）岑参十五歳のとき、一家あげて南へ黄河を渡り、東都洛陽を経て、嵩山の北側轅轅口から嵩山の西脚に登り、嵩山の南側の丘陵地帯に回ると、そこには岑氏の古い草堂があり、そこに住み着いた。「感旧賦」中で「負郭の数畝無く、嵩陽の一丘有り」と述べ、その序にも「十五にして嵩陽に隠る」と記している。これは岑参がかつて嵩陽に居たことの最も確かな記載である。嵩陽とは県名でもあるが、しかし、則天武后が登封と改名して、ずっと今日まで伝わっている。岑参が一生、登封といわなかったのは、これはおそらく則天武后に対する嫌

悪感からであろう。嵩山は唐代詩人たちから言えば、極めて重要であつた。唐朝は洛陽を東都とし、唐・高宗はかつて長期間、洛陽に住んで、夏には嵩陽宮で避暑をしたのである。武則天はさらに長安には居らず、洛陽を神都と改め、ずっと洛陽に住み、また自から最高峰である太室山にも登つた。というのは、嵩山は非常に高く雄大で、帝都からも近く皇帝の狩獵・避暑・封禅は、ここで行うことになり、高官貴人の別荘もここに設けられ、和尚・道士の寺や道観もここに建てられ、山林に隠居する人もここに住んだからである。盛唐の有名な詩人の中でも、嵩山にやつて来たことがない詩人はほとんどいないであろう。杜甫の故郷はちょうど嵩山北麓の鞏県である。李白は道士を訪問するため、かつて少室山三十六峰に遍く登山した。其の他では例えば、王維は嵩山のすそに住んだことがあり、王昌齡は中峰に登つたことがあり、高適はかつて潁水河畔に居住していたし、李頎も潁陽（潁水の北岸）に家があつた。その他の詩人にも嵩山に来たことのあるものは非常に多い。しかしながら、千年余りの変化により、草堂の類の遺跡は今日では少しも見つけられない。岑参の「嵩南の旧き草堂」も、安史の乱の中では、おそらくもう訪問できなかつたし、今日ではさらに何もなくなつた。近人でも岑参はただ少室山に住んでいただけであり、決して太室山に居住していないと考える人もいるが、嵩陽・潁陽は一つの地方である。岑参がかつて少室山に居住したことは、証明できる詩があり、当然疑いはない。だが、もし彼が太室山に住んだことを証する詩がないので否定しようとするならば、おそらくは不適当であろう。「感旧賦」の中で述べているのは「嵩陽に隠る」であり、一言も潁陽とは言っていない。しかし、その他の詩中にはしばしば「潁陽の帰客」という字は見えるが、「嵩陽の帰客」とは言つておらず、彼の少室山下の居住地と「十五にして嵩陽に隠る」地とは同

一の地でないとわかる。「峨眉の東脚にて江に臨み猿を聴き、二室の旧廬を懷ふ<sup>⑩</sup>」という詩は、明らかに「二室」と言い、一室を指していない。太室山のときの詩が残っていないことについて、おそらく年齢が幼なすぎ、たとえ当時、詩を作ったとしても、成熟したものではないことにより、後日まで保存されなかったのである。岑参が太室に居住した具体的地点は、今日では調査できない。現在、密県より西へ向かい登封県境地帯に入ると、廬店地の勢は平坦で、西行してまもなく嵩山の南麓に入り、山のふもとに中岳廟がある。南北にずっと横たわる石山の尾根を越えると、登封県城である。町の北側の地形は開けており、畦道が縦横に走り、ずっと嵩山のふもとまで到る。山脚にそって西北に向かえば、丘陵が小さいものから大きく、緩やかなものから峻しくなり、ようやく少室の北側に転回し、スロープを下ると轅轅道（河南省登封県西方）であり、古代にはここに関所が設けられていた。中岳廟から轅轅関まで約三十里余りあり、丘陵地帯には嵩陽寺・法王寺・永泰寺等あり、唐代の隠者は大体この一帯に居住しており、例えば潘師正<sup>⑪</sup>が居たところは逍遙谷であり、すなわち嵩陽寺東側の山谷中であつた。岑参の「嵩陽の一丘」もこの丘陵地帯に在ったはずである。岑参が太室にどのくらい住んで少室に移っていたのかということについて、拠るべき証拠はなく、疑問のままにしておくほかない。聞一多（一八九九—一九四六）が、岑参は一年住んだとしているのは、推測のことばでしかないのである。

太室にしばらくは住んで後、岑参は今度また少室に遷り住んだが、それは後日の詩中でいわれる潁陽である。現在の登封県は唐代では三つの県に分かれており、太室のふもとが嵩陽県でつまり登封県である。その東南三十五里が陽城県であり、武則天が告成県と改めたのが、即ち現在の告城郷である。その西七十里が潁陽県で、即ち現在の潁陽郷である。

唐代の潁陽県は決して潁水のほとりに在ったわけではなく、狂水の北に在って、その下流は伊水に入っていた。しかし、潁陽県の管轄範囲は潁水の右源・中源上流一帯まで含んでいたはずである。岑参の「潘陵尖より少室の居止に還る秋の夕べの憑眺<sup>⑫</sup>」詩には「火を点ず 伊陽の村」の句があり、少室山の麓に住んで、伊水北岸の村の灯を眼にすることができるとは、潁水中源上流東岸の山の丘に登り立ってようやく見える。現在の君召郷の東八里に水磨湾村があり、潁水中源の後側の河谷内に低く位置している。その東は一つの岡で、岡の上のくぼ地に泉があり、栗樹扒という名の村がある。栗樹扒から村の西の岡の頂上に登り、北望すればそこが少室の峻峰で、現在の名は挡陽山といい、地上から約五六百米の高さで、傾斜も峭しく登攀できず、村から約三里離れている。西に向って望めば視野がよく開け、君召郷一帯の村の家々がはつきりと見分けられる。君召郷の東南には前伊新莊・後伊新莊があり、緑の樹々が群がり集まっているのが見える。潁陽の郷から遠く二十里の外に位置しているので、一かたまりの樹木しか見えないが、それが集落であるとわかる。東に向って望めば、丘陵が起伏し、現在では童山は禿げた峰となつてはいるが、唐代では必ず緑鬱葱としていたにちがいない。ここに住み、秋の夕暮れ時分、西の岡に登り眺望すれば、潁陽一帯の炊烟がたゆたい、伊水以北の村舎の灯火が点点とともり、耳には少室山下の寺院の鐘の音が響いてきて、実に意に愜うものである。栗樹扒の村の西方二十里隔たつたところが潁陽で、一面平坦である。東方は登封から四十里余り隔たつたところは、山のスロープと溪谷との間で、その路は極めて歩きにくい。このため、唐代の潁水中源上流一帯は潁陽県の管内に属してはいたはずである。岑参は幾度か「潁陽の帰客」と自称しているが、ただ単に潁水の陽を指してただけでなく、戸籍も潁陽県であつたはずである。岑参の少

室の住居は唐の潁陽県境内にあり、彼はここに多年にわたって住んだ。

潁水中原は、現在は后河という名で、その水源は少室群峰の西の馬鞍山から出、唐代の人も馬嶺と称し、酈道元（『水経注』）の中で「少室通阜」と呼んでいる。これによれば、中原は「南溪」ではなく、南溪は潁水左源であり、現在は願家河という名で、その水源は少室主峰の南から出ている。左源の上も下も、山の岡はやや低く、西に向っても狂水一帯を見ることができない、それ故、岑参の「少室の居止」は「南溪の別業」ではない。そうであるなら、「南溪の別業」詩はおそらく、他人の詩を岑参のものと誤ったのであろう。

岑参が少室に住んだ時期、交友した人はみな隠者（張山人の類）和尚（山僧の類）であった。唐代の隠者は往往にして官庁の役人と交際しており、甚しいものでは権貴の人の家に出入りして、そのつてによってかなりの人がよく隠者ということで官位を得たものである。一度、岑参は少室山中へ張山人という人を訪ねていったが、会えなかった。というのは、この隠士先生は偃師県の県令周某と交友しており、二人は道伴れとなつて都・洛陽へ行つてしまつていたからである。岑参は自分で河へ魚釣りに行くこともあり、あるいは山へ登り遠近を眺望しに行ったこともあった。ある時は彼と山僧と連れだつて、四十里も外の太室山の主峰へ登山に急いだこともあった。武則天が嵩山の頂上に登つたとき、主峰の南側に点を祭る祭壇を築いたことがあり、後の人はそれを天壇と呼んだ。天壇の東側のあまり遠くないところに、一つ山の谷があり、壁のように数百丈の高さで直下している。その上に立つと、下に山谷中の雲が見ることができ、時には雷や雨が降るのを見下すこともある。秀麗ですばらしく峻厳なる少室山、雄大で莊嚴なる太室山、奥深く静かな自然の中で、毎日、川や森林、魚や鳥と一緒に過ごすことにより、岑参の詩の

イマジネーションが養われ、彼の性情もさらに涵養されたのである。

岑参が少室に居住していた期間に、短期間ではあるが緱山に住んだこともある。輟轅関から下ると、山の北側は一つの小さな平原であり、その平原の南部、山から遠くないところに黄土の丘がぼつんと聳えていて、高さ約二百米あり、これが緱山である。緱山の傾斜度は大きくないが、頂上部分がかなり平坦で、あたかも地上にすっぱり伏せかおせた鉄鍋のようであり、古い時代には覆釜堆ともいう名であった。伝えられるところでは、周の靈王の太子・晋がこの地から鶴に乗って仙去したということとで、唐詩の中でこのことを詠うものが頗る多い。武則天はかつてこの上に行宮を建築したが、今日では非常に高く大きい唐代の碑だけしか残っていない。緱山の西側三里のところに、少室の西の馬鞍山北面のスロープから流れ下つて来る馬澗河があり、酈道元は休水と称しているが、近年上流の灌漑に水を使っている、山の後に出て一条の干上つた河床しかない。この一帯は黄土層が厚く、灌漑する水があれば、みなすばらしい農業田である。緱山そのものも基本的に全て黄土であり、ただ基礎部だけわずかに青石であるが、これは土地の人がレンガを焼くのに土を取つて大きな坑を堀つた時はじめて見ることができたのである。緱山のまわりは村落が稠密で、南側は青山が高く聳え、山の谷川も奥深い。西の馬澗河の流水はめぐり廻つており、岸べの緑の柳は列を成している。ここで草堂を築いて住めば、少室とはまたちがつた別の風味がある。岑参はどうして少室に居住するのが心によく懐つていたのだろうか、かえつてふと緱山に引越して行つたのではないのか。根拠とする文字の記載がないので、いささかの推測しかできない。緱山は洛陽から比較的近く、八十里あまりしかなく、一日歩行すれば到達できる。唐・玄宗は関中が飢饉になるとよく朝廷を東都・洛陽に遷し、一二年住んでから、

また長安に戻って行った。開元二十二年（七三四）、唐朝玄宗はまた東都に來臨し、住み始めて三年になり、開元二十四年冬ようやく長安に引き返した。岑參はこの時、仕進を追求する道を踏み出し始めており、開元二十二年彼が二十歳の時、洛陽に上京して朝廷に書を献上したことがある。岑參は杜甫とはちがひ、洛陽の都市内に伯母がいたので、嵩山と洛陽との間を奔走することだけは出来た。潁陽から洛陽まで、直線距離では大して遠くはないが、ただ大きな山を越える必要があり、その山の北の傾斜は非常に峻しい坂で、通行しにくい。回り道をして伊闕に行くのは、非常に遠くなり過ぎる。緱山に住んでおれば、道程もかなり近くて平坦であり、一日で到達できるので、比較的便利であった。緱山の草堂もおそらく岑氏の旧居で、岑參がまだ科擧に合格してないときはもともとそれが隠居の所であり、たぶん山からは比較的遠かったからであろう。緱山から西北へ向って行けば、偃師に到着することができ、東北へ向って行けば鞏県に到着できる。岑參が緱山に居住していたとき、鞏県の南までやって来て李という家の客人となったことがあり、さらに鞏県の北の洛水に来て船に乗り秋を楽しんだこともある。鞏県の南に岑氏の親友の住居があつたらしく、岑參の上の二十二歳の兄が、少室の住居から北方尋羅に遊んでおり、その地は鞏県以南である。

岑參はさらに陸渾山（河南嵩県の東北）の別荘に住んだことがあり、その別荘は鳴皋山にあつた。李白の「岑徴君の鳴皋山に歸るを送る」詩に次のように詠っている

岑公相門子 岑公 相門の子  
雅望歸安石 雅望（謝）安石に歸す  
奕世皆鸞龍 奕世（累世）みな鸞龍（堯帝の名臣）  
中臺竟三拆 中台 竟に三拆たぐ

この「岑公」の家柄と岑參と全く同じであり、帰るところの鳴皋山に岑氏の別荘があつたはずである。ただ岑參が何時ごろ鳴皋山に住んでいたのか、もう考察できない。

岑參が嵩陽に隠居してから、まもなくして書を宮廷に献上し、いまだ才能を見込まれたわけではないが、生活の道を改めることを開始したのである。開元末年、彼は今度は西のかた長安に入り、あわせて外の土地へも遊んだ。官位を授けられる以前は、彼はやはり隠居生活を過している、作った大半は田園詩である。しかし、論述の便のために、彼のその潁陽居住時期は、総括して「嵩陽に隠る」段とし、長安に入ってからまた出游する時期は「両郡に出入」する段とした。

岑參が隠居していた後期は、唐朝廷内部に大きい変化が発生していた。開元二十二年（七三四）、李林甫が始めて宰相になった。この人物は唐朝・玄宗皇帝にへつらい迎合するのが上手で、また宦官と妃嬪たちうまく取り入り、非常に早く玄宗の信任を勝ち得たのである。さらに彼は色々な陰謀や手段をめぐらし、才能豊かな人を排斥打撃して、権力をだんだん自己の手の中に集中させた。開元二十四年（七三六）、李林甫は開元時代最後はかなり立派な宰相であつた張九齡（六七三―七四〇）を朝廷から押し出した後、大権を完全に自己の手中に掌握した。盛唐時代の政治はこの時すでに最後の一段の路程を歩み終えており、衰退の過程に向ってまたぎ始めていた。まさにこの転換点にあつて、岑參は隠居から歩み出て、仕進を追求する道へ脚を踏み出したので、彼の前途は順調であるはずがないことは預見できるものである。

## 注二の2

- (1) 原注①仙州が始めて置かれた年代には、開元二年・開元三年・開元四年などの説があるが、ここでは『旧唐書』玄宗紀、『元和志』に従う。
- (2) 原注②岑参の生年には、開元二年・開元三年・開元四年・開元五年、開元六年などの説があるが、ここでは聞一多説(開元三年・七一五)に従う。
- (3) 「題井陘雙溪李道士所居」(『岑参集校注』巻一・二五頁)  
五粒松花酒 雙溪道士家  
唯求縮却地 鄉路莫教賒  
五粒松花の酒 雙溪の道士の家  
唯だ求む 地を縮却するを 郷路<sup>は</sup>賒かならし  
むなし
- (4) 「阻戎瀘間羣盜 戊申歲(大曆三年・七六八)、余官を罷め東のかたに歸るに、屬たま江路断たれ、時に戎州に淹泊して作る」(同上巻四・三七〇頁)  
南州林奔深 亡命聚其間  
殺人無昏曉 屍積填江灣  
餓虎銜髑髏 飢鳥啄心肝  
腥臭灘草死 血流江水殷  
夜雨風蕭蕭 鬼哭連楚山  
三江行人絕 萬里無征船  
唯有白鳥飛 空見秋月圓  
南州 林奔深く 亡命 其の間に聚る  
殺人 昏と曉と無く 屍積みて江灣を填む  
餓虎髑髏を銜み 飢鳥 心肝を啄む  
腥臭し灘草死し 血流れ江水<sup>あか</sup>殷し  
夜雨風蕭蕭として 鬼哭 楚山に連なる  
三江 行人絶え 万里 征船無し  
唯だ白鳥の飛ぶこと有るのみ 空しく秋月の圓かなるを見る  
官を罷めて南蜀より 道を假つて茲の川に來たり  
瞻望陽臺雲 惆悵不敢前  
帝鄉北近日 瀘口南連蠻  
何當遇長房 縮地到京關  
瞻望す 陽台の雲 惆悵たり敢て前まず  
帝郷北のかた日に近く 瀘口は南のかた蛮に連なる  
何<sup>い</sup>當長房に遇ひ 地を縮めて京関に到らん

- 願得隨琴高 騎魚向雲煙 願はくば琴高に隨ふを得 魚に騎りて雲煙に向わん
- 明主每憂人 節使恆在邊 明主毎に人を憂ひ 節使恆に辺に在り  
兵革方禦寇 爾惡胡不悛 兵革方に寇を禦ぎ 爾の惡 胡ぞ悛めざる  
吾竊悲爾徒 此生安得全 吾竊かに爾が徒を悲しみ 此の生 安くんぞ全きを得んや
- (5) 晋・葛洪「神仙伝」巻五「壺公」に「(費長) 房有神術、能縮地脈、千里存在目前宛然、放之復舒如旧也。」とある。
- (6) 「列仙伝」のこの話は「法苑珠林」巻四十一「潛通篇」にも引かれている。  
〔琴高〕行涓彭之術、浮遊冀州、碣郡間二百餘年、後復時入碣水中取龍子、與諸弟子期日。期日、皆潔齋待於水傍、設星祠。(琴高) 果乘赤鯉魚出、入坐祠中、碣中且有萬人觀之。留一月、復入水。」
- (7) 「南池夜宿思王屋青蘿舊齋」(『岑参集校注』巻三・二四五頁)  
池上臥煩暑 不櫛復不巾 池上煩暑に臥し 櫛らず復た巾らず  
有時清風來 自謂羲皇人 時有りて清風來り 自ら羲皇の人なりと謂ふ  
天晴雲歸盡 雨洗月色新 天晴れ雲帰り尽き 雨洗いて月色新たなり  
公事常不閑 道書日生塵 公事常に閑ならず 道書 日々塵生ず  
早年家王屋 五別青蘿春 早年 王屋に家し 五たび別る 青蘿の春  
安得還舊山 東溪垂釣綸 安くんぞ得ん 旧山に還りて 東溪に釣綸を垂るるを
- (8) 原注①岑詩「初至西號官舍南池 呈左右省及南宮諸故人」(同上巻三・二二頁)の「他日能相訪 嵩南舊草堂」(最終聯)。
- (9) 原注②これは、『岑参集校注』附「岑参年譜」開元十七年の条に見られる。
- (10) 「峨眉東脚臨江聽猿 懷二室舊廬」(『岑参集校注』巻四・三五八頁)  
峨眉煙翠新 昨夜秋雨洗 峨眉煙翠新たなり 昨夜秋雨洗う



分明峯頭樹 倒插秋江底 分明なり 峯頭の樹 倒に秋江の底に插す

久別二室間 圖他五斗米 久しく二室と別るるの間 他の五斗米を図る

哀猿不可聽 北客欲流涕 哀猿聴くべからず 北客 流涕せんと欲す

- (11) 潘師正。宗城の人。諡は體元先生。王遠知に事えて道士となる。唐高宗、之を尊異し、その廬に即いて崇唐觀を作らせた。〔新唐書〕卷一九六・

〔旧唐書〕一九二

- (12) 〔自潘陵尖還少室居止、秋夕憑眺〕〔岑參集校注〕卷一・三頁〕詩は、後

出〔次節〕三、田園詩〕参照。〔火點伊陽村 煙深嵩角鐘〕。

- (13) 〔南溪別業〕〔同上卷一・二頁〕

結宇依青嶂 開軒對翠嶠 宇を結びて青嶂に依り 軒を開いて翠嶠に對

す

樹交花兩色 溪合水重流 樹交わり花は兩色 溪合し水重ねて流る

竹徑春來掃 蘭樽夜不収 竹徑 春來りて掃き 蘭樽 夜収めず

逍遙自得意 鼓腹醉中遊 逍遙して自ら意を得 鼓腹して醉中に遊ぶ

- (14) 李白「送岑徵君歸鳴臯山」〔李太白全集〕卷十七〕の冒頭二聯。